

BLEACH—彼岸花が枯れ逝く—

夢食いバグ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

斬魄刀彼岸花 尸魂界でも珍しい、複数の始解を持つ刀とされている。

護廷十三隊の最初期からいる古参であるが……

彼は毒を浴び続けていた。

これは幸せな夢を見続けた、現実から逃げた男の話。そして自らの体を壊していく話。

## 目次

彼岸花はまだ咲かない【二輪目】	1
襲撃【二輪目】	5
彼岸花の毒【三輪目】	11
巡れ廻れ【四輪目】	16
多くの脱隊者【五輪目】	21
骸は桜の下に。【六輪目】	25

## 彼岸花はまだ咲かない【一輪目】

あの世に地獄はあれど極楽は無かった、現世とあの世だけで完結するほど世界は簡単ではなかった。

そんな、極楽とも言えない尸魂界。

まだ護廷十三隊が出来上がったばかりの頃。一人の死神がいました、その死神は同じ仲間を信頼しそして愛してました。

「卯ノ花隊長、四番隊から参りました千夜八界と申します。負傷者の治療を行いますので内部に入ってもよろしいでしょうか？」

その人は、訓練による負傷者の治療に向かっておりました。十一番隊、剣術を極めた初代剣八が率いる所です。その人の名は千夜八界、尸魂界出身の貴族からではない死神。

【現時点】では、何も取り分けて言うことはない一般的な役職も特徴も無い死神。

ユーハバツハ率いるクインシーの襲撃が行われる前、彼岸花がまだ1つだった頃。

「はい、わかりました。」

「ありがとうございます、では失礼いたします。」

卯ノ花隊長は簡潔に言つて、道を退いて戻った。

入ったら後はいつもの場所へ向かえばいい、血と霊圧が混ざっていて訓練の時の負傷者の場所は良くわかる。

そこは死屍累々、死神が積み重なり転がってたコレを全部直すと………四番隊隊長も無茶を言うものだ。

「咲け 彼岸花。」

斬魄刀を取りだし始解をする、刀身が朱に染まり血のような物がポタンポタンと垂れ出す。先程切った虚の血がまた滲み出すよう、後で掃除をしなければ怒られてしまうなと思いつつ。籠った霊圧を取りだし、回道を使い直していく。

「おはようございます、無理ならばあつちで休んで。行けるようであれば戻ってください。」

「おっおう。」

直った一人に話しかける、そうすると。寝ている間に水をぶっかけられたように飛び起き戻っていく……多分休んだら卯ノ花隊長から、今の辛さが楽に感じるほどの檄を受けるのだろうかと思った。

「まずは一人目、この調子で片付けないとですわ……」

そうこうしている間にもまた負傷者が運ばれてくる……本当に何で四番隊隊長は一人で行かせたのだろうか、そう考えていた。

確かに四番隊の隊員として、回道は使えるが……何れだけの負傷者が十一番隊で出ると思っているのだ。始解のおかげで虚を狩ればある程度の霊圧を溜め込むことが出来るが……疲れるものは疲れる。後で直談判しにしようかと心に誓う。

「二百回」

負傷者を数えるのが面倒になってきた。だが後で帳簿に記さねばならないため、致し方がない。一応各隊負傷者数を四番隊として、カウントを行っている。

まだ、護廷十三隊は作られたばかり信用もまだ無い。大きいがぽつとででしかない、他の既存の組織からの目もある。

「まだ……やらないとな……」

結局この日は十一番隊の訓練終了まで、直し続けるはめになった。

\*

「明日は虚狩りかな……」

斬魄刀に貯めた霊圧と自身の霊圧をスツカラカンにして、眠りに入る……目を覚ますと目の前には朱い川が流れどす黒い土の一つに白い彼岸花が一つ咲いている。

ああ、呼ばれたのか。またアイツに。

「彼岸花 俺に何か用か？」

そう一つ言葉を言う、すると何処からか上物の着物を着た。流離いの旅人のような私と背格好の同じ、顔の見えぬ男が一つ下らないことをと嘲笑う。もしコイツが斬魄刀ではなく人であるのなら女の一つや二つ引っ搔けているであろう。

「なんだ？八界、俺とお前の仲じゃあ無いか。冷たいなあ……いやあ少し愚痴でも聞いてやろうと思ったのに。」

「只暇なだけか、彼岸花。」

「そうとも言う、することと言えば花を愛でることぐらいだ……酒もあるが。」

と朱い川から、手のひらに収まる二つの黒漆の盃で掬い上げる。ドロリとした朱の液体が中に入った、朱に染まった手で彼岸花は盃を一つ渡してくる。

「彼岸花。おまえの酒と吟う物は血の味だ、とても酔いしれて呑める物ではない。」

俺は顔をしかめて彼岸花から渡された盃をはたき落とす、満ちた朱は黒い地に吸い込まれ消え。盃のカランカランという音が響いた。

「いやいや、これからたんと呑むことになるのになあ……今から癪つけんと後がきついで。まだ我の名を知ったばかりと言うのに……全てを知ったと思ひ込み、これだけが全てと感じとる。」

全く可愛い奴だ。」

盃を彼岸花は呑む、俺を嘲笑うように川に流れる朱を呑んだ。私は彼岸花の「今知っている力を思い出した」切り結んだ相手の霊圧を一部奪い溜め込む……霊圧が相手の血と読み替えれば……彼岸花の行動には何も不思議なことはない。

「お前の力は切り結んだ相手の霊圧を一部奪い溜め込むだろう？ 卍解は除いて始解ではそうだと認識してるが。」

「違う、違う……まあお前がそう思い込んでる内は変わらんだろうがなあ彼岸花の毒を呑め。いずれ汝は毒を呑む、その瞬間わかるだろう……」

この、斬魄刀はいったい何を言っているのだ。元々頭のネジがとち狂った奴だが……あいも変わらせずに笑っている何が面白いのだ。

「毒を呑めば死に、至るだろう？ どうして呑む必要がある。」

「もう死んでおるだろ、八界いや……鈴な……」

酔ったように、死神になるにあたり棄てた生前の名前をからかうように言われそうに、なったその瞬間叫んだ。

「その名前を言うなっ！ お前が！ それはもう棄てた名前だっ」

「おお、怖い怖い。」

俺はこの斬魄刀の手のひらで踊らされているようだ、彼岸花は怒らない。

「中々の暇潰しにはなったなあ。」

「もう、逢いたくはないな……」

とても疲れてしまった、会話の主導権はいつもこいつに取られてしまふ……何でこいつが俺の斬魄刀なのだか。

そして目が覚めた。

これは俺が彼岸花の毒を呑む前のお話。

## 襲撃【二輪目】

起きて、虚退治についていく隊の名簿を見た……四番隊でも着いていくことはある。虚退治で負傷した兵を癒すのが仕事……もし旋回中に対処できない。強力な虚が現れた場合の連絡も行う。

結論は鬼道がそれなりに出来るものが隊の中に一人でもいれば便利となる。

「おっお前か！」

隊員に急に声をかけられた……思わず背筋が伸びて、斬魄刀に手を添えていた。突然の声かけは敵襲と勘違いするから辞めてほしい。

「はい、午後からの見回りにつかせてもらいます。」

「そっかーでも、何も無いところで斬魄刀に手かけるなよ……」

そうやって、少しあきれて言われてしまった。で午前中はどうしようか……十一番隊に混ざって訓練させてもらうか、また鬼道を誰かに教えてもらうか。

「アハハ、少し癖で……」

愛想笑いを浮かべた、斬魄刀を持つと少し安心するような気がするのだ。これは変えられない。

「じゃあまた、午後な。」

と隊員の一人は走り去っていく……多分、午前も午後も見回りとなっているのだろう。

「……霊圧使いたくないし。十一番隊で木刀か竹刀持って、訓練混じらせて貰うかな……」

十一番隊はやたらと、怪我人が出ることで以外。嫌いではない。むしろ地元の懐かしさを少し感じる、究極的に戦闘での能力がない自分の斬魄刀の性質故に、剣術は力になると思ってるし。

四番隊は後方支援中心部隊ではあるが、戦闘が行えるに越したことは無い……何時でも抗争で狙われるのは支援班と相場が決まっている。

「じゃあ、いくかな……」

そうやって、十一番隊へと向かっていった。

\*



「訓練中、すみません混ぜたってもいいですか？」

荒くれ者の怒号が鳴り響く訓練場の扉を叩いた、ビツクリとかはしないもう……直す為に何回も通って慣れた。扱い方も大体分かったし。

「アアっ！四番隊が混ざるだど!?ここは十一番隊だ、お前のようなモヤシ部隊が来ると頃じゃねえんだよお！」

開口一番、扉を開けられて言われてしまった……仕方がない。一番いい扱い方を実践をしよう念のために、木刀をすぐ引き抜けるように……つてもしかしてこれで癖がついちやってるのかな。

「えっと……貴方は、骨折11回霊圧混沌20回打撲5回突き指7回……」

今まで記録された、怪我の名前と回数を言って行く。応急処置等は含まれていない。全て四番隊で直していった物だ。四番隊を侮る者は……今までの怪我を公開処刑してやるっ！

「やめろろおおお」

そうやって、木刀を持って向かってくる。実際に注意ではなく煽る目的でやっているので仕方がない、いつも通りに木刀を引き抜き打つ。

パアンと弾ける音が響いた。

「だったら、最初から参加させろおおやつ。脳筋部隊があああ!!それなりに来て、直してるけどなあああ疲れるんだよ!どんだけ怪我してるんだよ!!霊圧すっからかんになるんだからなっわかってんのか!？」

そして、自らの精神にも発破をかけるように後半本音を含んで叫んだ。前半は支援部隊ゆえに致し方ないと思っているが……普通に変だしね。

上から来る力を抑えるように、力む。

「なんだとー!このモヤシ。ぶっ潰す！」

「潰せるもんなら、ドウゾツ!!」

俺は剣を斜めにずらし、攻勢を逆転させようとする。だが流石は十一番隊の隊員と言ったところか……体勢を崩さず、すぐさま後ろに飛び構えを直した。

構えを直されるのは正直、向かう側としてはかなり面倒かつきつい……こちらも構えを取った。木刀を顔の横に構えすぐ喉元を突ける体勢だ。

「突っ込まねえのか、びびりだな……」

「そつちこそ、向かってきたらどうです？ 後方支援部隊相手に怯んでるんですか？」

お互い挑発が始まる、どちらが先に向かうかの思考戦。十一番隊と言っても只力があって打つだけではない。一瞬が大切となる戦闘においての駆け引き、作戦というには盛大すぎるがそれにも長けた者が多い印象だ。

「……ならこつちから参りましょう……3で向かいますよ、1……2つ」  
どちらとも動かないなら……こちらからつ。そうやってタイミングをずらして、動けば相手がもう予想していたように反応して。

喉元にかかった、木刀を弾きお互いの鏑迫り合いへとまた変化した。

「何で！ 3で向かってこえねえんだよ！ 打ちそびれたじゃねえか!？」

「お前こそ、何で2で打とうと動いてやがる！ 3で向かうって言っただろうが!!」

「バーカバーカ、そんなこと聞かよ！ ここは戦場の為の訓練だぜ？」  
「知つとるわ、そんなもんバーカ。」

そんな、バカな会話をしながらやっているがパアンパアンと激しい音が鳴り響く。お互いの一歩も譲らぬ攻防……

後はお互いの体力勝負だろうと、なったその時……

重圧を受けるほどの莫大な霊圧を感じると共に脳に言葉が走る。

《全部隊に、通達！ ユーハバツハと名乗るものから襲撃警戒せよっ！》  
「……八界勝負は悔しいが一旦お預けだ、これは大物。四番隊へ急げ。」

と木刀を捨て、十一番隊へ多くの部員が向かっていく。それを見て一つ吐いた。

「生きろ、生きるのが無理なら息してろ。戦って傷つく馬鹿どもを地獄の底から引っ張り出すのが、四番隊だ！」

そうやってすぐに、瞬歩で戻る……きつと負傷者がすぐにごろごろ出てくるだろう……それも十一番隊の訓練での負傷とは比にならないほどに。

「何言ってる、この戦いで生き残ってお前をぼこぼこにしてやるよ。ああもう行っちゃまったか。」

そう、少し遅くまで残った人は吐いた。

\*

「……………コレはなんですか？」

急いで四番隊に帰った時に見たのは、複数人の遺体と思われるものだった。そこには見知った顔もいた数人いる、特にさつきまで朝話していた奴だ。

頭を砕かれ、体はバラバラにされて憎らしいほどに一人一人砕かれた斬魄刀ごと、丁寧に箱詰めされている。

普通ならば……遺体は少しずつ霊子へと変換されるはずだがその様子が全くなかった。

「ユーハバツハから送られてきた、開戦の合図。全くいい趣味をお相手さんはしているようだ。」

と同僚が舌打ちをひとつした、多分この遺体は敵側に細工をされているのだろう……霊子となり消えずに残り続けるように……

「ええ……今日の朝まで、午後の見回りと話をしてたんですよ。本当にお相手さんがたはいい趣味を持っている。」

奥歯を噛み締めた、口内を少し噛んでしまったのか血の錆びた味が広がる。だがずっと死を引きずってはられない、四番隊として少しでも死傷者を減らさなければ。

「負傷者はここに全て来る訳じゃない……お前は、戦場へ行くか……死ぬ危険性は遥かに高いぞ。こっちは残る、確実に人数が必要だからな……」

「……………分かった、そっちは任せる……」

四番隊の隊員は医療拠点として待機するものと、戦場に出て応急救護班として行動するものに別れていた。

もちろん戦場に直接でる、応急救護班の方が危険性は高いだがそっ

ちの方にある程度人が出ている事からも……この出来事の緊急性が伺えた……

この戦いに負けたら、もうお仕舞いなのだと言う……事実が。

戦場に出た、霊圧いくつも出たり……消えたり。混沌としていた、初めて足がすくむ。だが来てはいけないと鳴り響く警報を無視し、足を進める。体の全てが悲鳴をあげて壊れてしまいそうだった。

「……………戦っている、人がいる……………」

斬魄刀に手をかけて、引き抜く……戦う前で言うより予め準備はしておいた方がいい。こんな混沌とした空間だ、殆ど探知なんて出来な  
いだろう。

「咲け 彼岸花」

そう唱えれば、浅打から真つ赤な液体が垂れ始める……………

切り結んだ相手の霊圧を奪い取る。コレなら少し倒されていればその相手から奪い取れば味方を回復できる採算が取れるであろう。

それは、現実から見ればはちみつのように、甘すぎる見透しであった。

戦闘後の後を見たとき、そこは死屍累々。同士が倒れていた……そこは一人も倒した後はない……

すぐに、放置しても良い者とすぐに手当てした方がよい者………そして俺が手当てしても無駄な手遅れな者と分けた。

「……………大丈夫ですか？」

回道を負傷部分に使いながら声をかけた………ここでは完全な治療は出来ない、いきなり戦闘は求めない。動けばよい。

「あつあぁ。」

声は出てる………とりあえず、戦場からの移動………回復したら出てもらおう。そうやって意識が戻った負傷者を移動させようとする………足を引つ張られた。

「……………俺は、治してくれねえのか？もう手遅れなのか、辛いんだよ。

もうダメなら、早く楽にしてくれないか………刀振るえるのお前だけしかここに居ないんだ。」

それは悲痛な叫びだった、もう俺の力では直しようがなかったもし

かしたらがあるもしかしたら……

「四番隊本部に向かえば助かるかもしれないのに！何で今諦めるんですか！」

ほぼダメな状態だが、もしかしたら助かるかもしれない。生きてある限り可能性はあるのに。叫んでいた、敵がまだ近くにいるかもしれないのに叫んでいた。

「……………もう、向かえる状態じゃねえよ。それとお前の斬魄刀の力知ってるんだぜ？霊圧取れるんだよな……だったら俺が生きるより他の奴が生き残る可能性にかけたい。

だから……殺してくれ、頼む。」

俺は斬魄刀を握った、そして首に添えた。

力を込める、虚を切るのとは違う肉の感触が伝わった……

「……………ありがとう。」

斬魄刀に新しく、霊圧が貯まった。朱い彼岸花が一つ花開いた。

## 彼岸花の毒【三輪目】

「ごろんとが転がったものを見て……………」

「ありがとうございます、まだ治せます……………」

斬魄刀に貯まった、彼の最後の霊圧を感じながら重傷者を前線から移動させてからまだ軽傷な人たちに回道を使っていった……………」

そして、すぐに立ち去る。俺が出来ることはやった、託してくれたものを無駄にしないためにもまだ負傷者を直さなくてはいけない。

霊圧のぶつかり合う、膨大な熱気が辺りに散る確実に総隊長が戦っているのだろう……………」だけど気にしてはられない……………」まだ負傷者がいる。

「貴方の命……………」使わせてもらいます。」

\*

助ける内に、何人か同じような奴がいた……………」どうせ助からないから貫ってくれと。なるべく苦しめないように止めを差した、どうせなら一瞬であの人のように終わらせた。

俺は夢の中での盃を持ったアイツのように、朱に濡れた手を差し伸べて。負傷者を回道で殺した人たちの霊圧を使い直していった、俺自身の霊圧はもう殆ど使っている……………」切り捨てた者の残してくれた霊圧はまだ残ってる、まだ託されてる。

もう彼岸花から垂れる、朱い液体が血なのか元々流れていたものなのか俺には区別がつかない。

全てが命を刈り取った血に見える。

「まだ……………」戦っている人がいる。」

霊圧は残っている、瞬歩を使い進む……………」敵に見つかったら死を覚悟しよう。いやもう覚悟はしていた、応急救護班として戦場の中へ入って行くのだから。

四番隊の仲間の遺体も見飽きるほど見た、その中の一つに俺がなるのもおかしい事ではない。どうせ尽きるのであれば……………」託されたものを使いきってから。

後ろから、何かを感じた首をずらし避けると……………」

「矢……う・ちつバレたかつ。」

腕に矢が突き刺さった、俺はすぐに引き抜き後ろを向いた……敵だ。気づいたからよかった、気づかなかつたら頭を撃たれていただろう。

すぐさま瞬歩を開始し、攻撃範囲から逃れそうとする……だが俺は隊長や副隊長ほどの力は持っていない……わかりきっていた事だ。

「つつ……がつ。」

胸を撃たれ、行動するための脚も撃たれ、そして心臓を貫かれた。地面に落ちる、地に落ちる。花卉が散っていくように、只傷ついた人を直していただけ。

力は無かつたでも。

「はっ……止まれ、ない……まだ。」

心臓を貫いた矢を引き抜き、地面を這いずりながら回道で無理矢理直していく……俺の技量で出きるかどうかは分からない。

「……使いきつてない。」

何処かから溢れ出す朱を最後に、意識が裏返った。

「やあ、昨日ぶり！なんか今日は大変だねえ。」

声をかけられ、目を開ける……そこは精神世界だがいつもと違う点が一つあった。

それは白い彼岸花の他に朱い彼岸花が、複数咲き誇っていた事だ。しかもそれは、俺に霊圧を託したものの達の数と同じ……

「何でお前はこんな時でも、ふざけていられるんだ！大変だじゃない。」

そう言えば、状況も分からないようにケラケラと笑って。朱い彼岸花を見てそいつは。

「だって、やっとお前が帰る場所無き魂を斬ったことが嬉しくて嬉しくて仕方がないんだ。虚を斬っても死後の罪が洗い流され尸魂界へと、向かうのみ。」

やっど……流れずにここに残る物ができた。」

言う、何で仲間を殺してしまった事をお前の誉れだと言うのか全くわからなかった。

今死に逝く、最後の走馬灯さえコレとは忌々しい。口の中を嘔む血は出ない痛みすら無い。

「……………」

言葉がすら出なかった、何を怒ればいいのかすら分からなかった。只ひたすらに胸の内に無念だけがつのる。

「…………後悔はあるか？」

「えっ？」

「本当はゆつくり教えるつもりだったが。ここまで来て死ぬのはなあ……………我は八界が死に逝く事自体は赦すが、悔いを残すのは赦さぬ。

信じられないと思うが我は、いつもお前の事を思つとるんだぞ。」

と上物の着物を翻し、ニタリと俺に対する怒りが少し籠つたように笑いながら俺の方へあゆみよつてくる……………いつものように右手からあの斬魄刀のように朱い液体を滴ながら……………

「何を、俺にする気だ……………」

アイツが一步踏み出す、たびにこちらは一步下がった……………感じたものは異質なものへの恐怖。

「大丈夫だ、八界……………死にはしないさあいや今死ぬことを赦さない。世界がお前を死ぬ運命だと決めつけようと、只本当の力の初歩的な事を教えるだけ。

ああ逃げるのはよしてくれよ？

後々たんまりと呑むことになるかと忠告したのに逃げた、八界が悪いんだからなあ。」

アイツの右手から垂れる朱い液体がどす黒い地面に染み込むことなく、足に流れ固められた。

「壊れな……………」

体が動かなかった、いや動かそうと思つても阻害された。液体が体の自由を奪うように覆っていく。

「千夜 八界、毒を廻せ。我はいついかなる時でも、お前の幸福だけを祈つてる。」



心臓に撃たれた矢と同じ場所を、右手が貫き抉っていた。その場所からなにかが異物が入り込む、体に入ってはならないものと本能が警報をならし続ける。

「ぐアアアアアアあああ!!?!」

だが体の拘束にはばまれて抵抗が出来ない、只あるのは息苦しさ……生への苦しさ。死は救いであると戯言さえ真実だと思えてしまう。

「終わりつと……じゃあな、お休み。」

右手が引き抜かれる、その瞬間拘束していた朱がほどける。アイツがパンつと一つ手を叩いた、視界が黒で塗りつぶされる。

「……………!?!」

目覚めたのは、先程倒れた場所だった……心臓に手を当てる先程までが嘘のように直っていた。多分俺が自力でやった回道が成功した訳じゃない。

「コレのせいか……………」

俺は彼岸花を持った、死ぬことを赦さないと言っていた。本来の能力…………

彼岸花から垂れる液体を見た……ああそうか、コレを体内に入れる。アイツは流れ出すコレを毒として俺の体の中に入れ込んだんだ…………

「……………今深く考えるのはよそう……、今生かされた。いや、生きてるんだ。」

そうこう、悩んでる間にまた負傷者が出る。託された分だけ、歩みを止めてはいけない。

\*

まだ、隊長各が奮闘しているが劣勢だ。強大なのは相手にはしてないが複数で一般各も押さえ込んでいる。だから。

「今すぐ、直します。」

戦闘終了後の復歸の速度は大切だ、押すか押さえるかの勝負で今は押されているだから。全員で向かわないといけないんだ。

「霊圧はまだ持つ、大丈夫助けられる。」

託された人の分まで、今やらなくてはならないのだから。

## 巡れ廻れ【四輪目】

戦局は更に激しさを増していく、人が救えなかった者が増えていく。何回死体を見たのだろう応急救護班の人達の霊圧も消えて行っている。

「まだ……終わらないのか？」

ポツリと本音が出た、見たくはない仲間が居なくなっていく。もう下らない話も出来ない、虚で一人殉死したのならまだ考えがまとまった……だが。

あまりにも喪う物が多すぎた。

どうして、こんな事になったのだろうか……まだ直す人がいる。まだ引き戻せる人達がいる、俺はまだ繋げられるだろう？止まってはいけないんだ。

いた。遠くに見つけた、感覚がもう無いような脚を動かす。治療は一瞬一秒が直るかどうかに関わってくる、もう託されるのは嫌だ。

「……意識は、負傷は……」

すぐに回道を使う。霊圧は……きちんとたまっている、行く先には地獄も天国もありやしない。今いるのが煉獄であれば引きずり出さう。

大分損傷が酷いだが……

「戻れ、今お前がいるべきはここだ！逝くな、もう後少ししか居ないぞ。」

根気と気合いでしかない、技術の無さを恨むのはもう遅い。今やれることを全力でやるしか無いのだ。

その瞬間……

矢が飛んできた、俺は勝手に体を内部から動かされるように斬魄刀で弾く……弾かれた矢は斬魄刀に吸い込まれ淡い光を放ち消滅する。前を見ると、ガスマスクを被った死神以外の奴がいた……敵だ。逃げて、確実に治している人が殺される……やるしか無い!!矢を構える、タイムラグ等はこちらはまだ認識できない。

矢が雨のように降り注ぐ、一本一本が死へ迎えと言うようだ……

彼岸花の朱が地面に落ちる。

「……………」

矢を一本打ち落とす、さあ進めっ!!

腹が矢で抉れようともし、コイツをまず殺さなければ皆がまた殺される。致命傷になる矢は打ち落とす、致命傷以外は無視しろ痛みなどを越える。

矢が己の肉を抉る、朱が飛び散る……そしてすぐさま直っていく。回道等使っていない、彼岸花が勝手に体を直していく。

己が己で無くなっていく。

「つっ！何でっ死なない。」

腹に大きな空洞が空いた、本来なら痛みで動けなくなっているだろうだが。もうなにも感じない己の感覚などに意味はない。

ただ、守るためにコイツを殺す。コイツが何人殺したのかは分からない、だけれども助けられなかった者を殺した可能性がある、コイツを討てば弔いぐらいにはなるだろう。

弓と刀圧倒的リーチの差だ、なら恐怖を無くせ！矢の雨に打たれていけ。悔いを残して死んでいった、託された思いを。

「さっさとくたばれよ！」

ああ、五月蠅い………また朱い花卉が散る。

今度は顔が吹き飛んだようだ、致命傷？意識があるなら、動いているならまだ大丈夫だろう。こいつの命を刈る、それだけを考えろ。

それが今出来ることだ、化け物と言うならばそれを喜んで受け入れよう。

霊圧が高まっていくのが感じた、握る斬魄刀に力が籠るコイツを殺す。虚にも抱かなかった殺意それが己を只動かした。

「……………」

死んだ者達の痛みはどうだ、蹂躪したお前たちにわかるはずがないだろ？俺にもわかるはずがない、今生きている生きてしまっているのだから。

相手の喉元に最後の抵抗を突き立てろっ。

「……………三つ　力を貸せ彼岸花。」

そう俺が叫べば、斬魄刀の形が変わった朱い液体が流れずに留まる。見たことの無い形になる。

そこにあるのは、黒の宝玉を固めたような姿朱い流れる血ではなく……生が終わり流れることの無い黒。

流れ出ていた霊圧集まる。

喉元を貫く、朱い液体垂れた……肉を裂く感覚それは。味方を斬つた感覚によくにてる。命が散るのは呆気ないことを知った。

「なんだっ…………それは、もう始解はしてるんだろ?! 卍解かそれは隊長各にしか…………使えないはず。」

敵が驚いている。俺も実際に驚いてるでも解る……そうだろやっところに来て分かったんだ。

冥土の土産に教えてやろう。

「やっと分かったんだ。ちゃんと彼岸花の力だ……切り結んだ霊圧を刀血に溶かし奪い取る。それともう一つ、コレが本当の力…………」

刀血を体に取り込み……そして己の体を根本から組み替る、今まで使わなかった力。この刀の変化はそれを表してるんだよ。」

今までは、外部を中心に使ってきた。それを内部に使ったこと…………霊圧は奪えなくなるが。

戦う為の力は遥かに上がる。

重症だろうと、すぐに直ったらは……すぐさま組み替え造り直していたから。

「……………」

「もう聞いて、無いか。」

喉に突き刺した斬魄刀を横に風ぎ払い、首を落とした。手が朱に染まる、敵の焦点の合わない目が此方を見たような気がした。

また朱い液体が流れる状態に戻し、敵を刺し霊圧を奪い取る……プラスマイナス0ではないマイナスだ。

始めて使った力、霊圧の消耗が激しいだけだ。

「直さないと、ま…………だ。」

負傷した仲間の方へ戻る、治療の途中。

俺の負傷なんて、すぐ直って……直されてしまう。だから気にしないでいい腹が吹き飛ばうが俺自身の体なら簡単に直せる。

「もう、敵は居ない。安心し……」

触れた相手の体に霊圧を感じなかった、もう終わってた……

「……………次に行こう、助けられなくてごめん。」

二つの遺体を置いて次へ向かった、瞳孔の開いた焦点の合わない目がこつちをずっと見ている。

戦局は少しずつ……変わっていく、隊長各が変えていく。輝かしい英雄譚の一つにもなれず散っていく者達に背中を見せる、卍解だ……隊長の中には普段卍解を禁じられている者がいる、それはあまりにも力が強大すぎて……世界が壊れかねないからだ。水分が干上がる、すべてが干上がる。

まるで太陽が現れたように、圧倒的な熱気……俺はその霊圧に当てられて気を失った。

\*

次に起きたのは四番隊の医務室であった。随分人が減ったのだが………慌ただしき、いや尸魂界の霊圧の戦闘における乱れは無くなっていた。

すぐに聞いた話によると総隊長の戦いにより。尸魂界は長期間の干ばつ等の甚大な被害を被ったがユーハバツハを退けた、とのことだ。

俺は更に聞いた、何人死んだと。

詳しくは分からないが、半数以上殉死したと聞かされた。更に応急救護班での生き残りは数える程度と言うことも。

ある程度傷が癒えた後、助けられなかった者達の家を回った……。最後の言葉を預かった人もいる、家族にごめんと言ってくれとか……悔いはないやら……今でも脳裏にこびりついている。

死神になり皆を助けることを志した貴族

家族を養うために死神となった人

戦うことに価値を見いだした武士

幼馴染みを守りたいと志願した者

………沢山いた、沢山託して逝った。

一軒一軒回った、遺されたものは俺にどうしようもない怒りをぶつける者……泣き出す者……礼を言う者……

俺は結局……何を守れたのだろうか？

まだ、懐かしい霊圧がここに少し残っていた。

「……………」

斬魄刀 彼岸花に残っていた、体を組み替えることが出来るのであれば……自ら幻を見ることが出来るのではないか……？また、逝った者達に会えるのではないか？

「……ああ、少しは良いよな？」

その日、俺は彼岸花の毒を廻した。

## 多くの脱隊者【五輪目】

クインシーとの抗争から、暫くした後いつも通りの平穩が戻った。まだ傷跡は深い、多くの者半数以上の脱隊者を出したのだから………何せ人手が足りない。

壊れた物の修理や、大量に消費された備蓄の買い足し。四番隊は今日も忙しい……、まだ怪我がなおりきっておらず来る人たちもいるし。脱退した幾人かは、月に一回つまみ持ち寄って飲みに行こうと約束した。

妻持ちの奴もいるし、いつかは子宝の話も聞けるかも知れない。幼馴染みがいたやつは、実家の家業でも継いでいるだろう……団子でも買っておいてやるか。

「虚退治にもいかないとな……」

こんなときにも虚は現れる。一般兵士だろうが補給兵であろうが余裕があれば、退治に向かう。拒否とか嫌だとか言ってはいられない。

やっと死神本来の仕事を行えるぐらいには、機能が回復したと明るく見るべき………であるが。

そこには、見知らぬ死神がいた。見たことない顔だ恐らく新人であろう、黒い髪をひとつに纏めた俺より頭を一つ分ぐらい身長が低い。「何で……いきなり、新人の指導を任されているんでしょうか？しかも虚退治でこういうやつは……」

俺は新人を指導するほどの実力はない、それにまだ比較的新人だし平隊員だ……少し抗議をしたが。

「仕方がないだろ……、どの隊も人手が足りねえんだから。人材の育成も大切だぞ。四番隊だから、こいつが怪我してもすぐ手当てできる。」

後優秀なやつだから、戦闘能力の心配はしなくていい。」

「朽木阿木と言います！足手纏いに、ならないように頑張りますっなのでお願いいたします！」

そう、上司と新人に言われてしまい……。多分これで断れる人が



いたらかなり強いメンタルと立場を持っているだろう。一般隊員がそれを断れるはずがない。

「はい、わかりました。えーとこの区で行いますか？多分ほぼ人手不足だとは、思いますが……」

そういえば上司は書類を見て、多分隊員の現世や尸魂界の派遣状況等であろう。

「お前達には尸魂界の見回りを行ってもらおう、見回る場所は郊外中心にそれ以外は自由に決めろ。」

……………アバウト過ぎませんか？上司さん。

「うーんじゃあ、阿木君今から早速行こうか……」

80番台は普通に危ないから除外して、虚が出やすいところを回ろう……新人教育もあるが人手不足だ。なるべく働いてもらう。

「はいっわかりました、八界さん。」

うん、元氣ない返事だ。瞬歩で向かうけど……スピード合わせないとな……

「えつと……早すぎたりとかしたら、すぐに言ってねはぐれたら面倒だから。」

そうすると新人はうなずいた。よしじゃあ進むか、瞬歩を使い時々後ろを見て進む……無理はしていないようだ。

「八界さん、聞きたいことがあるのですが……不謹慎な事を言いますか。」

「うん、なんだい？」

「私の家に来ましたか？」

えつ……？何でそんなこと言うのだろうか……うーん記憶に無いな、不謹慎って何かあったの大丈夫っていつておく一応……

「気のせいじゃないかな？似てる人って。この世いや、ここはあの世だ……三人いるってよく言われるしさ。」

俺はそうやって。笑った後ろを向いたから、木に思いつきり正面衝突した……痛い。

\*

「気のせいじゃないかな？似てる人って。この世いや、ここはあの世

だ……三人いるってよく言われるしさ。」

八界さんはそう言ったでも、確実に家に来ていたのだ。終戦後のまだ傷跡が治ってもいない頃……護衛すらも説得で押し退けて。

「朽木白零の最後の言葉を預かった。」

と一つ言い続けた。

兄の戦場で残した最後の言葉を、家族への最後の贈り物を届けにきたのだ。母はどうしようもない怒りを、その送り人とにぶつけたが。

振り払いもせず……帰らず母の気がすむまで聞いてくれていた。それをちゃんと見ていた、霊圧も容姿も全く同じで何処をどう間違えれば良いのだろう。

「それ……本気で言ってる……」

そう思わず、言い返した時……。鈍い音と共に八界さんが後ろを向いていたせいで木に気付かず。正面衝突を起こし下に落ちていった。

一瞬、時が止まった。時は過ぎていくので思考の方が正しい。

「八界さーん!!?」

落ちていく彼を追いかけると、死覇装が木の枝に引っ掛かって。みのむしのように、釣り下がっていた。

「ごめんね、阿木君少しよそ見しちゃった……怪我とかは無いから大丈夫だよ。」

彼は、慌てたように枝から死覇装を外していた。大丈夫なのだろうかこの人、少し心配になってきた。

「気を付けて下さいね……八界さん。」

「こういうこと慣れてなくて、大丈夫サポートはしっかりするからさ！虚退治でお互い張り切っていこう。」

切り返すように明るく返答をしてくる、私は今あの事を言い出せなくなってきた……。いつでも聞ける……。あの発言は本気で言っているのかを。

「そうですね。」

私は八界さんに関する疑問を一旦置いておく事にした、今は仕事に集中するべきだ。いくら優秀と言われようが、実践で役にたたなければ木偶の坊でしかない。

「じゃあ、まだ虚見つからないし……もう少し移動してみようか。」  
「はいっ！」

返事をするのと瞬歩でまた行ってしまう、急いで追いかける。スピード自体は合わせてくれているのか、楽についていける。

そうやって暫く走っていると。

「そうだこの任務終わったら、お茶でも一つ奢ってやろうか？味は保証するぞ、特にみたらしが旨い。霊力使うと腹へるし丁度いいと思うてな。」

新人指導後のお茶に誘われた、……断る理由が無い。私から見ても上司と言うのもあるが、きちんと話を聞ける機会だ逃すわけにはいかない。

「ありがとうございます！」

「お互い頑張ろうな。」

そうやってまた無言に戻った、私も虚の霊圧の感知に精神を集中させる。

「見つけたっ！」

「いるっ！」

お互いに同時に見つけたのか、その方向に移動していく。

私は斬魄刀に手をかける、これは私の……死んだ兄から引き継いだもの。始解のやり方を見てきた。

「虚見えているかっ！阿木君！」

と八界さんが話してきた、本当ならば一人で退治に向かってしまうのであろうが。私と言う教育対象がいるから確認してきた。

「見えています。」

「わかった、支援に徹するので頑張ってくれ。応援してるぞ！」

「はいっ！」

これが、入隊して最初の虚退治だ。

兄の残した斬魄刀を構える、そして一ツかりその名を言った。

「反れ………水天水花！」

## 骸は桜の下に。【六輪目】

「反れ……………水天水花！」

その形は、刀身は硝子のように奥まで透き通った無色透明に変化していく……………何故かその中には水らしき青の液体が閉じ込められていた。

俺は妙に懐かしいような気がしたが、今は虚が前にいる気は抜けない。

「縛道の四 這縄！いまだっつけっ！」

言霊と共に自身の霊子が抜けていく感覚を覚え、相手の虚の腕にまとわりつき自由を奪う。

新人の補佐として俺はここにいる、止めとかはあいつに任せよう。

「わかりました、はあああ！」

そう一つ気合いを入れ虚に一直線に突っ込んでいく新入り、その込める霊圧と剣の重さは入ったばかりの頃の俺を遥かに凌駕していた。

所謂、天才または秀才。

これならば、これからの業務の呑み込みも速いだろう。虚にの切っ先が突き刺さる、すると……………突然内部から破裂した。

もう一度言おう、内部から破裂した。

「……………なにやってるんだ。」

そういえばその新入りは、虚の臓物ぽいものやら血と思われる物やらを被りながら。斬魂刀を見せてあわてて説明をしだす。

「えつと、えーと。中にある霊気を気化させて爆発起こしました。」

これは水の三変化が起こせる物なのです……………いま水蒸気起こして蜃気楼を作り上げること可能ですよ。」

……………えつとつまり、虚に流れていた霊圧やらに影響を与えて異常に体積を増やして……………内部からパーンってこと？

うわあえげつないなあ……………

「凄いやげどき、とりあえず……………体洗お？」

さすがに帰り血まみれの新入りを、ある程度任務が終わったとはいえそのままつれてある来たくない。

そのままの足で、川で血を洗い流す新入り。ちなみに俺は魚を素手で取っていた。大きな戦いが起こったばかりなので新鮮な食べ物はないし。

更に値段も高い。

俺自身は平隊員でしかないので、給料も安い。新鮮な魚が取れるここはある意味無料で質の良い魚がどんどん取れる夢のような場所だ。任務中に魚をとるなっ？ならば魚を分けて口止めしよう、今はどこも飢えているし。

飢えてないのは貴族位だ。

「……えっと終わりましたけど、何でそんなに魚持つてるんですか？」  
「魚あげる。」

「入りませんっ！てっ生臭っ投げないでください。いたい地味に尻尾の打撃がいたいっ！」

「……どうしようか魚をあげて口止めは効かないようだ。そういえば新入りは貴族だった……そりゃあ無理か……。」

「……魚取ったこと見逃してくれない？給料的に食費の圧迫が凄くて……物価もどれもこれも高いしさあ。」

「さつきとはうってかわって、生々しい生活状況話してきましたね。さつきまでの頼れそうな姿はどこにいったんですか？」

「任務終わったし、大体大丈夫かなあって。」

「……この上司色々大丈夫なのかな？」

「まあ、帰ったら団子食べに行こう。初任務の完遂祝ってやつだ。」  
「そうやって帰って、取ってきた魚を保存処理してから。待ち合わせの場所に向かった。お気に入りの団子屋だ、脱退したやつがやっている。」

跡継ぎ跡継ぎ、五月蠅かったとあいつの親は嘆いていたからなあ。

「おっちゃん、いつものやつ二つ。」

暖簾をめくり、店に入る席などはあまり埋まっては居ないが、客はぼつりぼつりときちんといるため。

閑古鳥が鳴いているわけではない。

空いている席に座り新入りを見た、すると新入りをすこしたどたと

しいが座り始める。

貴族の方だし、こう言うところには慣れては居ないのだろう。行つて選ぶというよりは、商人を家に呼んでいるだろうし。

「あいよ、みたらしとつぶ館と抹茶か。」

「ああよろしく。」

改めて店主が確認をとると、薄いお茶が出てくる。金にもならない屑葉で淹れたものだが喉を潤すぐらいの目的であるならば丁度いい。「初めて来ました、こう言うところは……基本訓練と家の行き来だったの。」

と新入りは目をうろちよろさせて話してきた、こういう暇な時間は話す内容が無いのが一番こわい。

「そうか、あの朽木家だもんな。まあこれからは貴族であれど仲間だし。これからこう言うところに来ることもあるだろう。」

早めになれておいた方がいいぞ。」

そうお茶をすすする、ほぼ質の悪い水をすこししか出ていないお茶の味で誤魔化したような印象がぬぐえない。

質の良いものは、お金を取って提供しているのだから当たり前と言え当たり前前と思える。

「はい、わかっています。所ですこし聞きたいことがあるのですが。」

本当に面識が無いのですか？」

新入りはまたその事を聞いてきた、もしかしたら酷く勘違いをされているのかも知れない。

「無いと思うよ、初めて会うし。普通君の家の前には行けないからね……今回だつて人員不足だから当てられたようなものだ、有力な者は大体出

払っている。本当に人員不足だから当てられたようなものだ、有力な者は大体出払っている。」

「はいっお待たせ。抹茶とあんことみたらし一本ずつお金はもう頂くよ。」

「きたようだ、はいおっちゃんお金。これで足りると思うがつり銭は入らない。」

いつも頼む物が二つ分来た、お金を支払いもう一度新入りの方を見

る。……………なんか見たことの無い食べ物を見るような様子だ。

もしかして串団子を見たことが無いのか？

「これは串団子だ、串をもつて喰う。抹茶はすこし苦めだから団子と一緒にの方がいいな。」

「わかりました、一応串団子を見たことはあるのでそんなに言わなくてもいいです。中々のものですね、特にみたらしいと思います。」  
「今回は奢りだから、ちゃんと食べとけ。」

そうやって話していると。

「おつ久しぶりだな、八界」

あの襲撃を機に止めた同僚の姿が目に入った、店の服を着て頭に髪が入らないようにはちまきを巻いている。

跡継ぎといっても止めたばかりなので、客に甘味を提供できるうてではないと言ったところか。

「いや、そうじゃないだろ。お前は止めたばかりだしな今日は新入りと一緒になんだ、多分いやお前より大分力はあるぞ。」

「きついことを言うなあ、てつ朽木家か。そりやあ訓練も大変だろうしな……………今はお互い大変だろうし頑張れるところか？」

「うーんそっか、お前も修行頑張れよ。俺に食わせられるものをきちんと作れ。何度甘味処の息子だーって言って失敗食べさせられたか。」

数え切れないぞ。」

「はいはい、わかりましたよっ。」

そう、下らない話をしていると新入りの動きが止まっていた。あり得ないものを見るような目、まるで鳩が豆鉄砲でも食らったかのようだ。

「うん、なんだ。餅が喉にでもつまったか？」

「……………八界さん

一体誰と話しているんですか??」